

# 山と博物館

第11巻 第4号 1966年4月25日 大町山岳博物館



## 映画撮影のため爺ヶ岳に上山

記録映画「特別天然記念物ライチョウ」の映画撮影のため、当博物館から二名の学芸員が日本シネセルの撮影スタッフ四名と共に、四月初めの爺ヶ岳に上山した。

この映画は文部省文化財保護委員会が、日本アルプスを中心とした高山地帯の極めて厳しい環境の中で棲息する、学術的価値の高いライチョウの生態をフィルムに記録して、この稀少な動物に対する一般の認識と理解を深めようと、企画したものである。

当館では、爺ヶ岳をフィールドとして昭和三十六年から三カ年に亘って生態調査を実施し、「雷鳥の生活」という本を公刊したが、このキャリヤーを買われて文化財保護委員会から撮影の指導をまかされたもの、初上山はライチョウの春のめざめの撮影をねらいとして四月五日から十二日間、種池小屋を基地としてクライクインした。

ライチョウは朝早くから行動するので、午前三時頃から起床して追跡しないと見失なう恐れがあり、寒風と積雪、撮影隊との連絡のため大変困難な仕事である。

しかも生態的に貴重なライチョウの行為、行動はもれなく記録しなければならぬので零下十度の雪中に半日、一日とねばらねばならない。

しかし、この映画が立派に完成してライチョウの保護思想の昂揚に役立つならば満足というものだ。

この映画撮影は、実日数百数十日、来年月完成し、初試写会は四十二年の若葉の頃になりそうだが、関係のみな様方の協力を期待したい。

# 女性と登山

大町山の会々長 久保田稔

去る三月二十日、二十一日の両日、飯綱山周辺において、長野県山岳連盟主催による全国女子登山者講習会が行なわれた。

この講習会の目的は、女子登山者に対する正しいスポーツ登山及び登山による遭難防止ということであるが、今回の内容は、女性の登山はかくあるべきだ、という結論を出すことよりもそれ以前の問題、例えば、女性であるがために受けているハンディキャップ、悩み、あるいはそれらを克服して山に登ることから得た体験、喜びなど、日頃考え、感じていることを卒直に語り合い、女子登山者のおかれている現状を認識し、問題点を提起することと、雪上技術の講習等を通じ、交流を深めることに主眼がおかれた。

こゝで明らかにされた問題点は、これからの一年間、彼女たちが所属山岳会に持ち帰り考え、検討され、来年再び顔を合せた時に、女性自身の手による女性のための健全な登山の方向づけがかなり明確な形で確立されるものと期待している。

私たち大町山の会からも、六名の女性会員と指導員としての四名の男性会員が参加したが、卒直に言って、今まで漠然とした形でしか理解していなかった女性登山に対する考え方を改め、早急に女性登山のあり方、指導方法を明確にする必要性のあることを痛感した。何となれば、全国で五百万人とも六百万人ともいわれている登山愛好者のうち、女性の登山愛好者は少なくとも三割は下らないであろうし、また社会的にも生理的にも男性と異なる面が少なくないからである。

私自身まだ考えを充分整理するまでには至っていないが、女性登山の健全化あるいは女性

性の生活に役立つ登山のあり方を確立する根本は山をやりたいという女性の立場を充分理解してやることにあると思う。

そこで、彼女たちと同じく山を愛する一人の仲間として、より多くの人々に彼女たちを理解していただくために、主として山岳団体に所属し、本格的に山をやりたいと願う彼女たちの立場を記してみた。

彼女たちに限らず山岳団体に加入しようとする人達に「なぜ山へ登りたいのか？」とたづねてみるとその答は千差万別であるが、あまり明確な答は返ってこない。しかし「どの程度山をやりたいのか」と聞いてみると、さすがに岩登りまでやりたいという女性は殆んどないが冬山をやってみたいという女性はかなり多く増えてきた。

夏山歩きだけではあきたらず、かなり積極的な姿勢を示している。そこで、更に突込んで「家族や職場の上司は了解しているのか？」と訊ねてみるとまたあまいいな答えに戻ってしまう。

事実、家族や周囲の人々の考え方はかなり厳しいようである。冬山などはもってのほか、夏山ですら反対、あるいは反対しないまでもあまり良い顔をしないというのが実情で、はなはだしき場合は、テントの中で男と一緒に寝るとはもつての外とくるから始末が悪い。それでも、家族に反対されたからと登山をあ

きらめてしまふばかり、内緒で……という場合もまゝあるようで（これは男性の場合にもいえるが）、私たちが最も恐れているのがこのケースである。

事故防止、登山の健全化の上からもこういうことは絶対なくする必要があり、そのためには、家族も頭から登山は危険なもの、娘の手を出すべきものではないと極めつけることなく、登山を理解し、娘を、リーダーを信頼して欲しいと思う。私たちがまた、そうしていただくための努力をおこたっていたことを卒直に反省したいと思う。

たとえば、登山というものは、単に頂上を極めることだけが目的なのではなく、その課程に大きな意義があるものであり、人と自然との接触の中で貴重な体験を得、人間的な成



長をもちたらずのものであることなど……。時にはスライドをやったり、コンパに招待したり、最も望ましいことは、普段仲間同志お互いの家庭を訪ねあつて家族の方々とも親しくする等の必要があるろう。ところで、前記のことがらをさておいて、現在の彼女たちは登山活動の中で充分な満足を得ているだろうか？

全国で女性のみの山岳団体は十あまりと聞く。大多数は男性中心の山岳団体に所属し、男性のまねをしているといえよう。事実、私たちが若干は女性であることを理解して指導してきた面はあるが、よく考えてみれば、それはあくまで男性に対するものの部分的な修正にすぎない。

技術的なものにしても、登山用具にしてもあるいは会の運営にしても、もっと研究され女性に適したものがあつてしかるべきものと思う。

このことは、決定的に女性の指導者が不足していることを意味している。女性の指導者が育たない最大の原因は、男性への依存心が強かったことと、結婚ということであろう。結婚によって山との縁を切ってしまう人が大部分であると、私は思う。

結婚後も、今までの経験を生かし、峠とか高原とか無理のない程度に家族と共に楽しむとか、詩歌、随筆等を書くとか、あるいは山にちなんだ手芸品を作るとか、山菜を研究してみるとか、生活に密着した山というものに目を向け、そういうものを、登山、くぐりでガツ／＼やっている現役の連中の中へ持ち込み交流することを考えてみたらどうだろう。

私たちの会では、少しでも彼女たちが理想の姿に近づくために、女子部という型で積極的、前向きな姿勢でこれらの問題に取組んでもらうべく指導している。

彼女たちに期待すると共に、一般の方にも暖かい目で見守ってやって欲しいと思う。

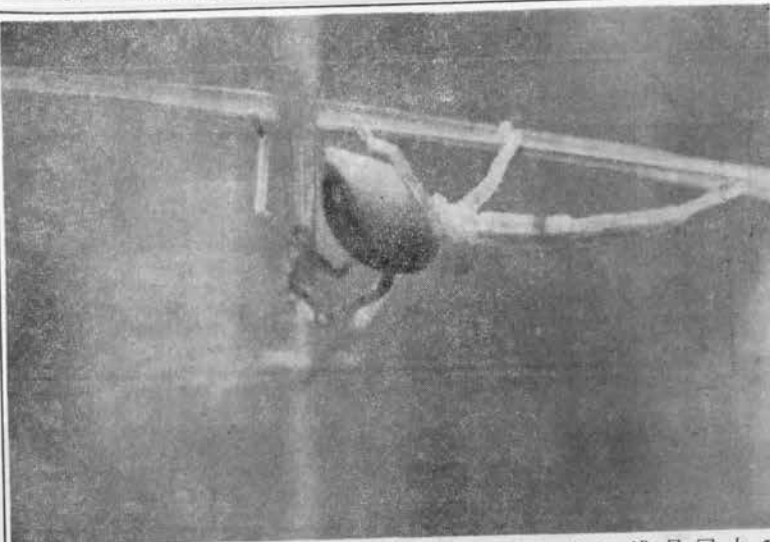
# コアシダカグモとツユグモの二、三の習性

大町小学校教諭 藤 沢 庸 助

この二つの種類のクモは、いずれもアシダカグモ科にふくまれていたものである。

この科の代表的なものであるアシダカグモは、神奈川県以南でとあまり見ることのできないもののように、長野県ではほとんどなじみのない種類であるが、はじめに、この生活についてちょっとふれておきたいと思ふ。アシダカグモは、普通、人家の天井のすみや台所のすみにもひそむ非常に大型のクモであって、夜間に活動をおこない、ゴキブリ

ツユグモのメス(一九六五年八月、居谷里にて)



などの害虫をとらえて食べるという。つまり家屋内で生活するものの一つとしてよく知られているクモである。

さて、コアシダカグモであるが、これは名前からも想像できるようにアシダカグモと同じ風、つまりもっとも近縁のものである。形もよく似ていて、やや小型である以外、ちょっと見ただけでは区別できないほどである。このクモは大町付近でも見つけられ見られるはずである。この種を県下で最初に見たのは昭和三十三年の夏、大町市の葛温泉の河鹿橋の下で一頭採集したときで、その後、

小県郡塩田町の農道わきの洞で一頭、同じく沢山の池のついで道の中で数頭発見している。また古い文献を見ると、浅間山麓産のものが報告されている。このような経験などからアシダカグモとはまったくちがった生活環境、つまり山地、それもかなり高冷地にすむもので、その生活の様式もちがっているのではないかという印象を強くしていた。

ところが、ちょうど上田市の豊殿小学校に勤めていたとき、今から三年前の夏休みのことだ、ある先生が、「うちには大きなクモがぞろぞろ出てくる納屋の戸を開けると、クモが首をたてて逃げていくのが見えるし、夜間は天井よりからたたみの上に落ちてくるので、ほうきでたたきつづす」「ねこがつかまえてじゃれることがある」という話をされた。以上の話の内容では、アシダカグモの場合とまったく符合するのである。暖かい地方に見られるアシダカグモも岩手県あたりで採集され

たということも読んだことがあるので、長野県にもいるとすれば分布上、価値があるので胸をときめかして、翌々日その先生宅を訪れてみた。そのお宅は小県郡東部町の滋野にあり、烏帽子から流れ出る小川のほとりに建てられた旧い家であった。時期的に繁殖期にはおそいと思ったが家の中をつぶさに調べさせて頂いた。

結果はやはり一頭も見ることができず、カマドウマばかり。アオグロハシリグモという、やはり大型のクモを一頭見つけたので、ひよっとすると話題の主はこれかもしれないと思ひ、見せると、「このクモより大きく、もっと黄色っぽい。脚ももっと長いような気がする」「家に出てくるクモは大きな卵をくわえてくるものもある」とのこと、やはりアシダカグモらしいので、ついには床下から天井より裏まで見させてもらって、やっと脱皮がらを二三こ採集することができた。

帰宅して図録と照合した所、背甲の長さが幅より長いこと、前縁に黄色斑がないことから、これはコアシダカグモであることがわかった。アシダカグモでなかったことでやや落胆に似た気持ちにはなりましたが、新しい事実を得たことで満足した。

一、コアシダカグモは、アシダカグモより北には産するが、洞穴ばかりでなく家屋内でもアシダカグモとよく似た生活をするものであるらしい。

三、卵のうをくわえて保護するという習性も同様であること。などである。



ツユグモの産室  
a. 産室の中  
a' その模式図  
b 他の一例

また、コアシダカグモの生活から逆に西日本日本のアシダカグモも山地の洞穴で生活し得るかという疑問もわいてくる。機会があったら何とかくわしい生活史を確かめてみたいと思っている。

次にべるツユグモは、やはり山地にすむ種類で、コアシダカグモより普通に目にするので、上田市の太郎山、スキで知られる菅平高原、大町では居谷里などではよく見かけられた。この種は、アシダカグモとは風がちがうがやや遠縁のものであって、生活にもだいがちが見られる。前の二種が暗い所を好み、湿った所に多いのに対し、ツユグモは乾草をうした草原にも多くて、日中もさかんに活動している。色彩も全体が美しい黄緑色で、ことに雌は腹背面に三本の赤いすじが走っている。それがジロロウグモのようにどぎつなく、クモにもこんな美しいものがあるのかと驚くほどである。

このクモの習性のうち最も特徴的な点は、産卵時のそれではないかと思う。

三十九年の十月頃、菅平高原を採集して歩

いたときである。ササの葉を巻いたクモの産室があらこちらで見られる。ササの葉を巻くクモとしては、カバキコマチグモがよく知られているが、その巻き方がずいぶんちがうのである。カバキコマチグモは非常にきれいに産室をつづるが、これはずいぶんずさんなものが多かった。不審に思って中を開いた所親グモとともに、腹部がヒスイ色にかがやいた子グモが多数はい出してきた。一見した所やはりカバキコマチグモかと思つたが、よく見るとそれはまぎれもなくツユグモなのである。予想だにしていなかつたことだけに驚きは大きかった。夢中で二、三個をギセイにしたがその結果は次のようなものである。

一、ある産室の親グモは、その中で卵のうをくわえている。これはアシダカグモと同じでカバキコマチグモでは見たことがない。二、ほかのものでは、産室の内がわに卵のうを付着させている (スケッチ参照)

クモの生活 関口見一著「(前略)」：卵からかえり(中略)：卵のうはほとんどやぶれるばかりになります。そのうち親グモは家の軒先などの風通しのよい所へ行って糸で卵のうをくつつけます」と書かれたアシダカグモの習性から考えておそらくツユグモも産卵後しばらくは卵のうをくわえていて子グモが卵のうを破って出るようになると産室内の壁へくくりつけるのではないかと推測することが予想されるわけであるがはたしてそうであるか今後とも注意して見ていきたいと思つている。とにかく産室をつづるといふ事実(居谷里ではズミの葉三枚からなるツユグモの産室を見て)は、アシダカグモ属に見られないものである。

ちょっと横道にそれるが、ここでやはり疑問になるのは、カバキコマチグモは、子グモのために自分の体を餌として供するものであるが、ツユグモはどうであるかということである。それがわかるとまことにおもしろいと思つて

ツユグモの習性で、なお興味あることは、人家にも侵入していることである。菅平の教育大学研究所の天じょうに、この雄が、窓ガラスには雌がはりついていていたことがある。多分電灯に集まる昆虫をとらえに来たものであるが、アシダカグモ科である以上、あつて不思議ではないと、ひとり納得げにうなずいた次第である。コアシダカグモにしても、ツユグモにしても、その生活史についての報文は今の所ないので、何とかそれをつきとめてみたいと思つている。

以上、アシダカグモ科の二種について、アシダカグモと比較しながら習性を述べてきたが、採集する際に、分類学上の近縁関係なども考えながら、その習性を観察してみると、形態ばかりでなく、生活面でも関連性のあることがわかつてくる場合があつておもしろいものである。

### 春山の遭難防止

宮坂 惺 憲

登山の普及、大衆化に伴ない登山人口は年ごとに増化し、昨年中北アルプス後立山連峰に入山した登山者だけでも実に二十四万人におよび今後ますます増化の傾向を示し、国民の「山の悲劇をくりかえすな」という悲願をよそに遭難事故は登山者に比例して増加し昨年中発生したのもうち大きな事故だけをひらつてみても二十八件におよび、うち死者十八、負傷者二十一を数え警察や地元遭難防止対策協会等関係団体の真剣な遭難防止の努力にもかかわらず多くの若く尊い生命を失なつており、現在鹿島槍等で遭難した五名の遺体がいまだに収容もされず、そのまゝ眠つている現状である。特に昨春の連休遭難をふりかえつてみるとたとえ例年にならぬ異常天候という悪条件が重

なつたとはいへ、あの様な有史以来の大量遭難を出したことは余りにもひどすぎた。ここでも爺ヶ岳、五竜岳等において十二名におよぶ犠牲者を出したが、当時悪天候になる予報が出され警告も十分行なわれていたのにそれを無視しての行動だけに無謀登山のそしりはまぬがれず、最低のスポートなどという悪評さえ聞かれる結果となつたわけである。

今年も既に春山が始まり一部のパーティーは入山しているが特にこれから始まる飛石連休には昨年のような悲劇は絶対くり返してはならないと思う。春山の遭難率は最も高くまた、事故原因を検討してみても不可抗力的なものは極めて少なく、登山者自身が気象条件を軽視し、また経験技術に欠ける者が事前のトレーニングを行わず不安定な気持で無理な日程を組んで行動したり、危険な場所や雪渓上で疲労が増し、遭難しているなど山に対する研究不足と気象急変が主な原因になつており、大多数の遭難が登山者自らの不注意によつて起されてる。総じて登山者は二、三回の山行でベテランになつた様な錯覚におちいり、自信過剰の者が多く、これが死へまで追い込んでいられるように思われてならない。

山は生きていける、そして常に動き危険をはらんでいける、春山をやる者に特に注意してほしいことは、  
1、常に謙虚であり、登山マナーを守る。と。自己の力を過信せず己れを持つ知識技術の安全限界内における行動をとり、登山マナーを無視しないこと。  
2、登山計画は慎重に。  
体力技術に心した山やコースを選び、多少の経験があつても、各山毎の地理、地強等をよく研究しまた切りつめた日程、強行登山、単独登山はさけること。  
3、よいリーダーを選ぶこと。

少しぐらゐの経験でリーダーになつての登山は危険である、春山といつても冬山に対する正しい知識と技術のある者を選

ぶこと。  
4、準備に万全を。  
食料、医薬品、トランジスタラジオ等を含めた装備品は十分に用意すること。  
下界は春でも山は冬である。特に今年の春山は低温が予想され吹雪、雨などによる凍死の危険もあるので防寒具、雨具、非常食は必ず携行すること。

5、天気予報に注意すること。  
最近の気候は低気圧の異状発生が多く、山の天候は急変するので常に天気予報に注意し、引返す勇氣をもつことも必要だ  
6、なだれに注意すること。  
今年の春山は底なだれの危険が多いので沢にはいる場合、キャンプ場選定にも十分注意すると。

7、雪渓を歩く場合融雪状況を検討するとともに異常雪庇に注意すること。  
8、登山計画書の提出と登山者カードの記入を励行すること。  
等であるが、これらのことをよく守るとともに登山が健全なスポーツとして発展し大衆化してゆくためにも、いたましい遭難を起し、その後始末だけを地元警察や関係市町村、団体などにもつてこないよう、今後登山者や山岳会のモラルと技術の向上に加え、国の遭難対策に対する恒久的な施策を要望してやまないものである。(大町警察署次長)

#### 表紙説明

四月のライチョウ(オス)爺ヶ岳にて  
撮影 千葉 葉 彬 司

山と博物 館 第11巻第4号  
一九六六年四月二十五日発行  
発行所 長野県大町市T.P.L(大町)二二一  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市下仲町  
大糸タイムス印刷部